不思議な柄のハンカチだな。
そう思いながらすれ違った人が落としたハンカチを拾う。
「あの、落としましたよ。これ」
「……ああ」
振り返った男は不愛想につぶやき、やけに疲れた様子で「助かった」と言った。
受け取るために差し出された手を見て、顔を見た。男性は明らかに荒んでいた。目は昏く、口は固く結ばれ、いつかカメラを通して見た兄によく似ていた。明らかに何かあった顔をしていた。何か言うべき気がした。違う。言わなければ、と思った。
かつての後悔が背を押した。
「素敵な柄のハンカチですね」
「……え」
「これ、どちらで買われたんですか？」
男性の目は不審者を見る目に変わった。
「……バザーです」
「へえ、どちらのです？」
「……急いでるんで」
「まあまあ、いいじゃないですか」
強引だとは思いつつもそう言って引き止める。男性の目は不思議とおだやかになった。
「入神社の境内で二週目と三週目の土日にやってるバザーで見つけたんです」
「そんな素敵な催しがあるんですね」
「知らないんですか？」
さも、知っていて当然のような反応だった。私にはまったく聞き覚えがなかった。
「え？　そんな有名なんですか？」
「ここらへんで知らない人はいないんじゃないですか」
私は生まれてこの町に住み続けている。そう言われて何も言わずにはいられなかった。
「どこにあるんですか、その神社」
「すぐそこですよ。通りから横に逸れて、路地を少し歩いたところ」
指は最近リフォームが終えたばかりの和菓子屋の脇道を指しているようだった。
「和菓子屋の裏ですか」
「まあ、裏と言えば裏ですね」
その辺りにはドーナツの穴のように空いた空き地しか無かったはずだけど。
「その辺りは空き地じゃないですか」
明らかに男性は溜め息を飲み込んだ。
「行けば分かりますよ」

「ないですよ、神社なんて」
男性はむっとし、わたしもむっとする。
「じゃあ連れて行ってください」
「ええ……。……わかりました、いいですよ」
行けばいいだけですから、と男性は背を向けて歩き出す。その時に一瞬見た横顔は自殺した兄のものとはまったく似ないものになっていた。私は既に目的を果たしていたが、背を追った。最初の目的とは違ってしまったけど、私は話しかけたことを後悔しなかった。

男性の足取りに迷いはなかった。たしかにこの町の人のようだった。
ただ、そうならなぜ路地の中に神社があるなんて嘘を言うのか、不思議に思った。
私たちは結局空き地の前に着いた。草刈りがされてあって整理されていたので、余計に空き地感が強かった。
「ほら、空き地じゃないですか」
「え、……え？」
横に見た男性は口をぽかんと開け、目をまるくしていた。比喩ではなく、正しくそうしていた。本気で驚き、本気で困惑していた。
「いや……あるはずなのに……」
自分に言い聞かせるような言い方だった。
そんな様子に私は何も言えなかった。男性の言い分が間違いであることは目の前に証明されたけど、私は困惑しきってしまっている相手に、何か言葉を続けることができなかった。
「いや、本当に……ここで祈ったばかりで、ハンカチだった買ったばかりなんです」
「そう言われても……ほら」
目の前の空き地を示す。
「……」
男性は口をぱくぱくと動かしたが、結局は何も言わなかった。
「どこから来たんですか？」
「入町です。この町に住んでます」
男性に余裕がまったくなかった。
「伊里って、伊万里の伊と里で伊里ですよね」
「違います。入る、で入町です」
「「……」」
私たちは黙る。そして、おそらくは似たようなことを思った。
この人は、どこから来たのだろうか。
俺は、どこにいるのだろうか。